
プレ・バド！ Love & sporty

May

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プレ・バド！ Love & sporty

【Nコード】

N4154B

【作者名】

May

【あらすじ】

夏美は国際大会で活躍するような凄腕のバドミントンプレイヤー。しかし、とある事情により、今まで通っていた名門校をやめ、星華学園中等部に入学した夏美。そこで夏美は運命の出逢いをする！？

運命の出逢いと宿命の戦い（前書き）

この物語はフィクションであり、話に出てくる人物、団体名等は、実際には関係ありません。

運命の出会いと宿命の戦い

プロローグ

その少女は、広いバドミントンコートの上に立っていた。ユニフォームの胸元には、小さな日の丸がある。

『さあ、いよいよこの瞬間が来ました。間もなく、この十二歳以下バドミントン国際大会で、初の日本人チャンピオンが誕生しようとしています！！ 栄光の勝利まで、あと、ワンポイント！！』

一本！ 観客が声を合わせて言った。

少女はラケットを構え、そして、サーブを打ち込んだ。シャトルは綺麗な弧を描き、高く打ち上がった。しかし、少し高すぎる。

アウトか。誰もがそう思った。

シャトルはライン上に落ち、くるくると廻って、コート内に跳ね入った。

「In point・21-14！ winner、Nathumi Umezaki！」

会場が、一気にエキサイトした。

「決まったーッ！ 優勝は、日本代表・梅咲夏美だー^{うめざきなつみ}アアー！」

この日、バドミントンの国際大会十二歳以下の部にて、初の日本人チャンピオンが誕生した。

1st・Game・運命の出会い！？

早朝。カーテンの隙間から、朝陽が差込み出した頃、梅咲夏美は、ベッドから身体を起こした。時計を見ると、時刻はA m・五時。どうやら、早く起き過ぎてしまったようだ。二度寝をしようかと思ったが、どうも眠気は完璧に吹っ飛んでおり、眠る気にはなれなかった。

仕方なく、夏美は、ベッドから下り、スリッパを履き、階段を下りて一階の洗面所に向かった。

洗面所の水道の蛇口を捻ると、まだ冷たい春の水道水が出てきた。夏美は、その水で顔を濯ぐと、フェイスタオルで顔を拭き、化粧水を付けた。

そのあと、美しい深紅の腰まであるロングヘアを、丁寧に櫛でとかし、黒いヘアゴムで一つ結びにした。こうしてみると、夏美は物凄い美少女だということがわかる。

そのまま夏美はリビングに向かい、横にあるキッチンの冷蔵庫から、ペットボトルのミネラルウォーターを取り出し、キャップを開けて中身を口に含んだ。

リビングに戻ると、大きな飾り棚があり、数々のトロフィーやメダル、そして賞状があった。横に電話台があり、電話の横には写真立てに入った、一枚の写真があった。

そこに写っていたのは、夏美の家族だった。夏美は写真立てを手に取り、写真に向かって話し掛けた。

「お父さん、お母さん。そして、お姉ちゃん。夏美は今日から、中学生です。いろいろ大変かもしれないけど、いつでも夏美のことを見守っていてください」写真立てを元に戻すと、夏美は再びキッチンに戻り、お湯を沸かし、緑茶を三杯入れた。その緑茶を、お盆に乗せて、二階に上がり、自分の部屋の隣の部屋に持って行った。その部屋には、立派な仏壇があった。その仏壇に、お茶を綺麗に並べ、夏美は三本の線香を上げた。夏美は手を合わ

せ、目を閉じた。

しばらくして、夏美は部屋を出て、またまたキッチンに行き、今度は自分のお茶を入れた。それをリビングの机とソファアがある窓際に持つて行き、ソファアでゆったりとお茶を飲んだ。

夏美が時計を見ると、まだ十五分しか経ってはいなかった。朝食を摂るには、早過ぎる。

夏美はおもむろにテレビのリモコンを手に取り、電源を入れた。やっていたのは、早朝のニュース番組だ。ニュースの内容は、コンビ二強盗が出たやら、火事が起きた等を報じていた。

『続いてのニュースです。昨夜、A高速道路で、飲酒運転のドライバーが運転するトラックが、軽自動車と激突し、軽自動車に乗っていた、村木さん一家、三人が亡くなりました』

夏美はそのニュースに見入った。テレビには、逮捕された男の写真が映し出されていた。髭が生えた、いかにもトラックのドライバーというかの男だった。

「まだ、こんな事故があるんだ……」

夏美は、悲しそうに呟いた。

ニュースは天気予報に移り変わり、簡単な日本地図に、太陽マークやら傘マークがついていた。ここらへんはどうやら、快晴らしく、暖かいが、風が強いらしい。

六時になると、夏美はキッチンで朝食用の目玉焼きを焼きながら、トーストとプチサラダを作り、さらにベーコンを焼き、目玉焼きに添えた。おまけにヨーグルトも付け、栄養バランスバッチリの朝食が出来上がった。

「いただきます」

朝食もしっかり摂り、歯を研いたあと、自分の部屋に行った。

夏美はクローゼットを開け、そこから制服一式を取り出した。

落ち着いた感じのブラウンのブレザー、青と赤の格子模様がポイントの黒いスカート、ベージュのベストとカーデガンに、男女兼用の斜めの青と赤のストライプ柄のネクタイ。夏美が今日から通う、

私立・星華学園中等部の制服だ。

夏美はパジャマを脱ぎ、指定のワイシャツに袖を通し、ボタンを止め、スカートを履いた。初めてのネクタイで、戸惑いながらもなんとか締め、ベストにするかカーデガンにするか悩んだが、結局カーデガンにした。ブラウスを羽織り、指定の黒の校章のワンピースが入ったはいソックスを履いて、完成。

大人っぽい、シックな感じになった。

「よし！」

夏美は指定のスクールバッグに必要な物を詰め、そのバックを持ち、階段を駆け降りました。

時刻は六時三十分。

夏美が通うことになる星華学園までは、電車で一時間ほどかかる。今、家を出れば、七時三十分ぐらいに学校に着く計算だ。早く着くことに、損はない。それに夏美は、入学テストでちゃっかりトップを取ってしまい、新入生代表に選ばれてしまった。新入生代表は、八時までに着かなければいけないので、余った時間は、見学でもしていればいい。

夏美は鞆を持って、玄関に向かった。

玄関には、バドミントンのラケットが入ったラケットバックを肩にかけ、外に出た。

太陽の眩しさに、夏美は思わず目を細めた。春とはいえ、早朝の風は冷たく、それに乗って、桜の花弁が宙を舞っていた。家の鍵をかけ、夏美はすぐそばの駅に向かって歩き出した。

ホームで待っていると、電車はすぐに来て、夏美はそれに乗った。電車の中は、満員ではなく、夏美は座ることができた。調べてみると、この時間帯が一番空いているということがわかったのだ。

電車にゆられていると、ついつい眠りそうになるが、景色を見て、眠気を覚ました。

今日は、本当にいい天気になるだろう。夏美は微笑み、そのまま長閑な景色を見続けた。

『次は、あ、星華学園前、星華学園前』

このアナウンスで、夏美は跳び起きた。　どうやら、いつの間にか、眠っていたようだ。

夏美は荷物を確認し、降りる準備を整えた。

駅に着くと、夏美はすぐに電車を降り、改札に向かった。

改札を出ると、そこは桜並木だった。　何十本もの桜木が、各々に花弁を散らしていた。

桜並木を二十メートルほど歩くと、大きな門があった。

私立・星華学園。

横に陣取っていた、大きな石に、こう彫られていた。

夏美は、そこにいた受付の女性に、三日前に届いたばかりの生徒証を渡し、返されると一緒に、クラス分けのプリントを受け取った。プリントの裏には、校内地図が印刷されていた。　今、いるのは正門で、中等部は真っ直ぐ進んだ校舎らしいく、右に曲がれば、幼稚舎、初等部。　左に曲がれば、大学部と大学院があり、中等部の方には、高等部がある。

夏美は真っ直ぐに奥に進んで行くと、大きな校舎が二つ、見えてきた。

向かって右が、中等部、向かって左が、高等部だそうだと。

夏美は中等部の玄関に行くと、そこには下駄箱と兼用のロッカーが、ずらりと並んでいた。

「えーと、1206……1206、と。　あつたあつた」

夏美は自分の出席番号のロッカーを見つけ、それを開けた。　ロッカーは広く、十分な荷物が置け、夏美はラケットケースとローファーを入れ、上履きに履き変えた。　ロッカーの鍵を回し、鍵がかかったのを確認して、夏美は二階の職員室に向かった。　新入生代表は、先ず始めに、職員室に寄るようにと、事前の説明で言われていた。

職員室前に来ると、夏美はドアを数回ノックし、入室した。

「失礼します。 新人生代表の梅咲夏美です」

入室すると、中の職員は、思ったよりも少なかった。 みんな、入学式の準備で、大半が出払っているのだろう。

「待っていたわよ」

職員の代わりに、一人の女生徒が出て来た。

「初めまして。 星華学園中等部生徒会生徒会長の宝木未来たからぎみらいよ。

新人生代表の梅咲夏美さんね？」

「は、はい！ 初めまして！」

宝木未来は、ブラウンのショート・ヘアーで、何やら伝わってくる威厳があった。

「それじゃあ、早速だけれど、入学式のリハーサルに行きましょう。

あ、これ、新人生の言葉の台本ね」

渡されたのは、二枚組の紙で、文字が淡々と綴られていた。

「付いて来て。 この学園は広いから、ちゃんと付いてこないといはくれるわよ」

「はい！」

二人は職員室を出て、再び一階に降りると、校舎の一番左端の大きなドアを開け、そこから続いている渡り廊下を渡り、体育館のドアの前に来た。 ホントに広い場所だ、と夏美は思った。 急ぎ足で来たのに、ここまで三分もかかった。 これは、教室移動も大変そうだ。

体育館の中は、沢山の職員と幾人かの生徒が、急がしそうに走り回っていた。

「蓮れん！ ちょっと来なさいよ！」

未来が叫ぶと、パイプ椅子を両脇に四つずつ抱えた少年が、それらを引き摺りながらやって来た。

「呼んだー？」

見たところ、彼も新人生だった。

「あ、これ、あたしの弟の蓮。 あなたと同じ新人生よ。 体力馬

鹿で無駄に暇だから、手伝わせてるの。 まあ、よろしくしてやってあげてよ」

すると蓮は、満面の笑を浮かべ、どこにこんな元気があるのだろうと不思議に思っぐらい、明るく挨拶をした。

「俺、宝木蓮！ よろしくな！」

「よ、よろしく」

これが、後にバドミントンの混合ダブルスで、世界一のコンビネーションを見せるようになる、梅咲夏美と宝木蓮の運命！？の出会いでした。

1st・Game終わり。

2nd・Game・宿命の出逢い！？ と入部テスト

2nd・Game・宿命の出逢い！？ と入部テスト

「俺、宝木蓮！ よろしくな！」

「よ、よろしく」

蓮は、異様なまでに元気な少年だった。そして、パイプ椅子を両脇に四つづつ、計八つを抱えながら、元気にニコニコとしているのだ。

「この娘は梅咲夏美ちゃん。あんたと同じクラスだから、仲良くしなさいよ」

「おう！」

蓮はとにかくニコニコニコと笑っていて、パイプ椅子を抱えていることも忘れていたようだ。

「ようはそれだけ。さつさと準備しなさい」

「てか！ 新入生に準備させるなんて、可笑しいじゃんか！」

「あたしの弟だからよ。ほら、チャッチャとやる！」

蓮はチエ、と言いながら、渋々と戻って行った。

「さ、リハーサルを始めましょう。時間が余ったら、見学でもしていればいいわ」

「はい」

リハーサルは簡単なもので、先ほど渡された台本を読み合わせただけだった。未来は、台本を暗記していたようで、何も見ずに、すらすらと暗唱して見せた。

「ご苦労様。あとは自由にしていいいわ」

と、言い捨てて、未来はすたすたとどこかに行ってしまう、夏美

は体育館で一人、ぽつりと立ちすくむことになってしまった。

移動しようにも、広くて迷ってしまいそうで、下手には動けなかった。

「おーい！」

そんなときにやって来たのは、未来の弟の蓮だった。

「どーしたんだ？」

迷ってしまいそうで不安だと話すと、

「任せろ！」

と、案内係を引き受けてくれた。話によると、蓮は幼稚園から星華学園にいるらしく、

「この学園は俺の庭だぜ！」

と、大袈裟に言い切った。しかし、そんな蓮でも、夏美には頼もしく感じられた。

「付いてこいよ。いいところに連れてってやるよ！」

蓮は夏美の手を引いて、上履きのまま出れる中庭に出て、更には木々を掻き分け、奥に進んで行った。

「ここ、ここ！」

目の前に広がっていたのは、辺り一面に広がる美しい花ばなが咲き乱れる花壇。

「な、いいとこだろ？ この花、俺が育てたんだぜ！」

「ホント、綺麗」

夏美は思わず、息をするのも忘れてそれに見入った。

「秘密にしてくれよな？ ここのこと」

「うん……！」

風に乗って、桜の花弁が、辺りに舞散った。

夏美が蓮を見ると、蓮はまるで小さい子供のようにワクワクしたような顔をしていた。よく見ると、蓮の瞳は、少しのくすみもなく、澄んでいた。「なあ、君の髪って、綺麗な色だね」

蓮が唐突に言ったので、夏美は驚いた。

「あ、ありがとう」 蓮は二力と笑い、元気に言った。

「友達になろうぜ！」

「え？」

「俺、君と友達になりたい。あ、下心があるわけじゃないから、心配しないで」

蓮は、その澄んだ瞳で、夏美を真っ直ぐに見つめていた。

「うん。　　いいよ」

夏美がいうと、蓮が跳んだ。嬉しそうに、笑っている。

「んじゃ、俺がここでの君の友達一号な！　改めて、俺は宝木蓮！　蓮って、呼んでくれよな！」

蓮が右手を差し出してきたので、夏美も左手を差し出して、握手をした。

「私も、改めまして、梅咲夏美です。　好きなように呼んでね、蓮君」

「おう！」

この出逢いは、後に夏美の運命を大きく変えるのだが、二人はまだ、それを知らない。

「んじゃ、次に……」

「蓮！　いるの！？」

次の場所に行こうとすると、女の子の声が聞こえてきた。

「桜？^{さくら}」

「蓮！」

現れたのは、桜色のセミロングの髪を、これまた桜色のリボンで結んだ、ケイソな感じの少女だった。その少女は、夏美を認知した途端、顔を顰めた。

「……その娘、誰？」

その少女は、険しい表情をして夏美を見つめた。

「あ、さっき友達になった、梅咲夏美。　^{はるな}新入生代表なんだぜ！　あ、梅咲。　こいつは、俺の幼なじみの桜春奈」「ふーん、よろしく」

春奈はあくまで夏美を不機嫌そうに見つめる。

「よろしく」

強い風が吹いた。桜木が揺れて、一気に沢山の花弁が散った。その光景は幻想的で、しかし、冷たい空気が、辺りに張り詰めていた。

この桜春奈は、後に夏美の宿命！？ のライバルになり、三人の関係は、複雑に絡み合っていく。

突然場面が変わるが、入学式後の教室である。

生徒の割合は、初等部からの進学七割、外部受験からの進学三割といったところだった。

因みに夏美は今、クラスメイト数名に、質問詰めに使われていた。

「どこから来てるの？」

「どーやって勉強してんの？」

「趣味は？」

「特技は？」

それは本当に、『首が回らない』ほど忙しかった。おまけに『

猫の手も借りたい』ぐらいだった。

「特技は、バドミントンデス」

あまりに沢山質問されたもので、辛うじて答えられたのは、それだけだった。

「マジで！？」

それに反応したのは蓮だった。

「マジでマジで！？」

異様にテンションが高かった。

「う、うん」

「オッシャー！！ 意外な共通点！」

「え？」

蓮はまた跳んでいる。

「俺も、バドやってんだ！」

「へーエ、偶然だね」 蓮は嬉しそうに跳び回っている。 はしゃいでいるうちに、入って来た教師と正面衝突をした。

「何をやっているんだ？ 蓮坊」

「夏矢木センセ！」

入って来た教師は、長身でなかなかのイケメンだった。

「夏矢木センセが担任なのか！？」

「まあな。 つか、蓮坊は相変わらず落ち着きがねえな。 これは、未来も大変だ」

夏矢木先生の登場で、女子が一気にヒートアップした。 よつぽど好みらしい。

「HR始めんぞ！ とつと自分の席に座れ！」

生徒たちは各々の席に着き、それを確認した夏矢木先生は、HRを始めた。 因みに蓮は、夏美の席の左真横にいる。 このクラスは、後ろの名前の人が多く、そうなってしまったのだ。 蓮は横で、ニコニコとしている。

「んじゃ、お前達に適当な自己紹介をしてもらおうか。 各自、自分の名前と簡単な自己PRをするように」

出席番号順で自己紹介が始まり、夏美にすぐに回ってきた。

「梅咲夏美です。 趣味は……料理で、特技はバドミントンです。ふつつか者ですが、よろしくお願いします」

この瞬間、

「どこがふつつか者だよ！」

と、誰もが心の中でツツコミを入れただろう。

「はい、次！」

蓮の番は、すぐにやってきた。 順番が回ってきた蓮は、元気よく、自己紹介を始めた。

「宝木蓮！ 趣味は動くこと、特技は武道全般！ 所属部は、バド部！ よろしく！」

この時夏美は、何故蓮が自分がバドミントンをやっているのを知

って喜んだのか、初めて理解できた。

「んじゃ、どんどん行くぞ」

そのまま順番は回っていき、数分後には、全員の自己紹介が終わった。

「以上、一年二組、四十名だ。みんな、仲良くするように」

その後、十分ほどのHRが続き、帰宅を許された。

「梅咲ー！」

真っ先に飛んで来た（とはいっても、隣同士）のは、やはり蓮だった。

「バド部な、今日からあるんだぜ！」

「知ってるよ」

「一緒に行こうぜ、仮入部の紙、持ってる？」

夏美はHR中に配られた仮入部申請用紙を取り出した。夏美はHR中に、必要事項を記入してしまった（夏美は印鑑を常に所持）。

「ウン、いいよ。でも、その前にロッカーに寄ってもいい？ ラケットケース、その中なんだ」

「オフコース（もちろんだ）！」

何故、そこを英語で言ったのかはわからなかったが、気にしないことにした。

「んじゃ、行こうぜ」

桜春奈は、自分のクラスのHRが終わった途端、教室を出て、蓮と夏美のクラスに向かった。

「蓮！」 二人のクラスのHRは既に終わっていて、人数も疎らで、教卓にいる夏矢木先生の周りに、女子が集まっていた。

「お、春奈じゃねーか。どうした？」

春奈に気付いた夏矢木先生は、春奈に、問い掛けた。

「蓮は？」

「蓮坊なら、梅咲夏美と一緒に、体育館に向かったぞ。置いてかれたのか？」

「似たようなものです」

顔は笑っていたが、春奈の内心は煮えたぎるような気持ちで一杯だった。 どうして？ そんな気持ち、心の中で渦を巻いた。自分のこと、忘れて？

「……………」

憎い、梅咲夏美が憎い。私から蓮を奪った、あの女が憎い。刹那、春奈は体育館に向かって、走り出していた。全力で走って行った。蓮は、渡さない。

体育館に入ると、既に幾人かの生徒が、コートにネットを張っていた。

「遅い」

未来は不機嫌そうに、蓮に言った。

「宝木先輩？」

どうしてこの人がここにいるのだろうと、夏美は不思議に思った。

「あ、うちの姉貴、男女混合のバド部で、キャプテンをしてんだよ」

「よろしく」

また、新たな事実が発覚した。

「さて、入部テストを始めますか」

「はい？」

それは初耳だった。

「入部テストっていつても、簡単に实力を見るだけだから、落とされることはまず、ないわ。 安心しなさい」

まあ、いいか、と夏美は思い、簡単な準備運動を始めた。

「蓮君、アップ、付き合ってください？」

「シユアーっ（もちろん）！」

待たしても下手な英語だった。

二人は準備運動を終えると、コートに入った。

「クリアとスマッシュだけでいいから」

「了解」

打ち始めると、夏美の実力が、かなり高いということに、蓮はすぐに気がついた。

（上手い！）

夏美のやり方は、一つ一つ、丁寧だった。

（丁寧な打ち方に、多彩なラケットワーク、それに、何よりも、綺麗なフォーム……。世の中に、こんな上手い娘が、本当にいたんだ！）

スマッシュを打ち込まれた。速過ぎて、蓮には打ち返せなかった。

「ありがとう、もう大丈夫だから」

「あ、ああ」

蓮の瞳の奥には、先ほどの夏美の姿が焼き付いて離れなかった。

「お願いします、宝木キャプテン」

「ええ、コートに入ってちょうだい」

主審が座る台には、既に一人の男の人が座っていた。

「どうも、サブキャプテンの本田秀一ほんだしゅいちです」

「ど、どうも」

美形なうえに、物腰が柔らかそうだった。

「本田君、主審をよろしくね」

「わかりましたよ、未来。存分に楽しんでください」

二人がコートに入ったことを確認すると、秀一は、簡単にコールした。夏美は、左手にラケットを持っていた。

（サウスポー、か）

多少は気になったが、そのまま続けた。

「打ち合いは？」

「大丈夫です」

「じゃ、始めましょ」

簡単に打ち合ったあと、試合が始まった。

「ファースト・ゲーム、ラブオールプレー」

お願いします、と簡単に挨拶し、トス（サービス権）じゃんけんをする、夏美が勝ち、サービス権を得た。

「一本！」

「カット！」

サーブをする時、相手の準備ができているか確認するのは、常識で、サーブを打つ側は一本、受ける側はカットと言う（因みに相手が準備ができていないうちに打つと、無効になってしまう）。

「はあー」

夏美は軽く深呼吸をして、サーブを打ち込んだ。
パシンッ！

シャトルは綺麗な弧を描き、反対のコートに飛んで行った。

未来は、すぐに反応し、そのシャトルを打ち返した。返って来たのは、クリアだった。

夏美はそれを読んでいたらしく、既にラケットを構えていた。

そのままラケットを勢いよく振り下ろし、シャトルに当てた。かなり取りにくい角度にスマッシュが飛んで行く。

これには未来も驚いたようだが、それでも冷静にヘアピンという技で、ネット際に小さく返す。が、ネット際には既に、夏美がいた。

夏美はそのシャトルを、大きく打ち返した。

シャトルは、伸びて伸びて、アウトラインギリギリに着地した。

「イン、ポイント・1-0」

それを見ていた蓮が、興奮して声を上げた。

「すげー！ 梅咲、お前マジで何モンだよ！？ うちの姉貴、ああ見えても全国レベルだぜ！？」

「ああ見えても、って何よ！」

仲の良い姉弟だ、と夏美は思った。

「さて、本来はもう文句の付け所がないくらい完璧なんだけど、辺りを見て？ 新人生は愚か、部員すら、まだあたし達しか来てないの」

確かに、新人生は夏美と蓮を入れて二人、他の部員もまだ、五、六人しかいない。

「で、提案なんだけど。 このまま試合、続けない？ 私としてもあなたの実力を、もっと知っときたいのよ」
断る理由もなかった。

「はい、喜んで」「じゃ、本田君、よろしくね」

すると秀一は蓮に何やら指示をして、それを聞いた蓮は倉庫に走り、出て来た蓮は、何かの紙を持っていた。

「正式に試合をするなら、スコア用紙を使いますよ？ いいですね」
蓮が持つて来たのは、正式な試合にも使われているスコア用紙のコピーだった。

「では、プレーを再開します」

試合は再び夏美のサービスで再開した。

「一本！」

「カット！」

その様子を、蓮は瞳を輝かせて見つめていた。

「すげー」

蓮は先程から、その言葉を繰り返し発している。

「俺も……あんな風に試合、してみてえ」

蓮の夏美への憧れは、徐々に積もっていった。

蓮は、時が経つのも忘れ、夏美と未来のラリーに見入った。 気がつくと、他の部員や新人生もやって来ていて、二人の試合を観ていた。

「上手いわね、あの娘」

「桜……」

いつの間にか、真横に立っていた春奈に驚きながらも、蓮は試合

を観ながら言った。

「俺、同い年であんなに上手い娘、始めて観たよ。

何か、憧

れるな……」

「あ、そう」

春奈の態度は、何やら素っ気なかった。

「強ければ、いいつてもんじゃ、ないでしょ」

春奈は妬いている。蓮を引き付けてしまう、魅入らせてしまう存在・梅咲夏美に妬いている。そのことに、蓮は気がついてはいないが、春奈の気持ちは、積もっていく。

「イン、ポイント・スリーオール」

ワッ、と辺りが湧いた。

「やー、お見事お見事」

手を叩きながらやって来たのは、夏矢木先生だった。

「でも、そろそろ始めてもいいんじゃないか？」

夏美が辺りを見回すと、いつの間にか、大勢の生徒が試合を観ていた。それに気付いた夏美は、一気に紅潮した。

「は、恥ずかしい……」

夏美は思わず両手で顔を覆い隠した。

「夏美ちゃん」

「は、はい？」

未来は夏美の後ろに立っていた。

「『あなたのその強さの秘密を知っているわ』」

「え？」

未来の唐突な発言に、夏美は驚いた。

「休み時間に、少しお話ししましょう」

そう言つて、未来は行ってしまった。

夏美の中では、疑問符が踊りまわっていた。何故、未来があんなことを言つたのか、夏美にはわからなかった。

これから、不思議な関係が出来上がるとも、知らずに。

2nd・Game、
終わり

3rd・Game・夏美の秘密

3rd・Game・夏美の秘密

その後、入部希望者の新入生の実力を先輩が手分けして確かめ、自己紹介をすることになり、先ず、三年生、次に二年生、そして一年生の番になり、夏美がトップバッターになった。因みに、新入生の内容は、名前、出身小学校、最後に一言、だった。

夏美が立ち上がると、全員が一斉に夏美を見た。夏美は再び紅潮しそうになったが、何とか堪えて、先ず、名前を言っ、始めた。

「梅咲夏美です。出身小学校は、篠山^{ささやま}大附小で……」
そこまで言う、辺りは騒然とした。

「篠山大附って、めっちゃ名門校じゃん」

「中学校じゃ、確か、去年バドで全国準優勝じゃん」

辺りに、疑問の声が上がった。

「質問ー！」

元気よく手を上げたのは、蓮だった。

「何でうち来たの？」

「合わなかったから。」

夏美は即答した。まるで、その質問を予測していたようだ。

「はいはい、個人的な質問はあとにしなさい」

夏矢木先生がニコニコと言った。

「……夏矢木先生って、バド部の顧問だったんですね」
「そうだよ？」

「……」

夏矢木先生の見た目では、テニスでもしていそつだ。
「はい、次々！」

「えーっと……」

順調に進んで行き、しばらくすると、春奈が立ち上がった。

「桜春奈です。初等部からの進学で、目標は」

すると春奈は、夏美をキツ、と睨みながら、こう言った。

「梅咲さんを、倒すことです」

一瞬、沈黙が起きた。

「何言ってるんだよ、桜。確かに梅咲は強いけど、俺達、梅咲に今日初めて会ったんだぜ？ それなのに……」

「蓮は黙ってて」

春奈の声音には、敵意どころか、殺気すら感じられた。

「私、この娘のこと、知ってるのよ」

辺りには、冷たい空気が張り詰めていた。

「あの娘は 梅咲さんは、昨年度の十二歳以下の国際大会初の日本人チャンピオンなもの！ 強いのは、当たり前よ！」

辺りは再び、騒然とした。その中でも蓮は、特に驚いていた。

「梅咲、それって、本当なのか……？」

蓮は、恐る恐る尋ねた。

「……それは事実です。でも、私はそのことについては一言も言っていないし、これから自慢する気もないです。桜さんが私を倒すのはいいですが、理由がいまひとつ、理解できません。言いたいことがあるなら、はっきり言ってお下さい」

夏美は少し、怒っているようだった。

「すぐにわかるわ」

春奈はそう言い捨てて、チャッチャと座ってしまった。

「まあ、ちょっと変な空気になっちゃったけど、続けようか」

夏矢木先生がそう言うと、辺りに張り詰めていた空気が、一気に晴れたような気がして、楽になった。

そして、何事もなく、自己紹介は進んで行き、しかし春奈は、あくまで夏美のことを、冷たい目線で見つめており、夏美もそれに気がついてはいたが、あえて無視することにした。

「よし！ お、次は蓮坊の番だな」

「おっしやー！」

蓮が元気に立ち上がり、自己紹介を始めた。

「宝木蓮！ 初等部からの進学で、ただいま友達募集中！ よろしく！」

蓮の自己紹介を聞いて、上級生は一斉に笑い出した。

「いいぞー、蓮！」

「もっとやれ！」

「イエーイ！」

蓮はピースをして、楽しそうに飛び跳ねていた。そんな蓮を見て、夏美も思わず笑ってしまった。

自己紹介が終わると、短い交流タイムが与えられ、夏美は未来に呼び出され、体育館の裏に行くことになった。

「『あなたのその強さの秘密を知っているわ』。私はさっき、そう言ったわね」

「はい」

夏美は、何を言われるか、ドキドキとしていた。

「あなたのお姉さん 秋亜^{あきあ}とは、親友だったのよ」

「！」

夏美は驚いて、顔を強張らせた。

「ご家族のこと、とても残念だったわね」

「……………」

この人は、どこまで知っているのだろう、と夏美は不思議に思った。

「あなたの生い立ちも全て、知っているわ」

「じゃあ、お姉ちゃんがよく言ってた、『みらい』さんって、あなただったんですね」

「ええ」

夏美の肩が、小刻みに震えだした。

「辛いこと、思い出させちゃったかもしれないわね……………」

「お父さんとお母さんが死んだのは、事故です。……でも、お姉ちゃんは……」

夏美は、必死に涙を堪えていた。

「お姉ちゃんが死んだのは、私の所為です……。私を庇って、死んだんです。お姉ちゃんには、未来があつたのに。私が死ねばよかったんです……」

耐えきれず、夏美の瞳から涙が溢れ出す。

「そんなこと、秋亜は望んでいないわ。あの娘はいつも、話すことは夏美ちゃん、あなたのことだったわ。あなたを、すごく大切にしている、命をかけてでも、あなたを守るって、言ってたもの」

未来は震える夏美の肩に両手を置いて、静かに言った。

「今度、ゆっくりお茶でもしながらお話しましょう。ほら、泣きやんで。せつかくの美人が台なしよ」

未来はハーフパンツのポケットからハンドタオルを取り出すと、夏美の涙を拭ってやった。

「ありがとう、ごさいます……」

未来は夏美の頭を一回撫でて、微笑んだ。

「さ、行きなさい」

「はい……！」

夏美は未来に一礼し、走って行った。それを見送っていた未来は、再び微笑んだ。

「大きくなつたわ。あの夏美ちゃんが」

未来が帰ろうとすると、近くの物影から突然、桜春奈が出て来た。

「緑沢秋亜」

どうやら、全てを盗み聞きしていたようだ。

「昨年度の中学生女子全日本バドミントン大会シングルス部の優勝者。国際大会でも活躍していたが、突然の事故でその短い人生に幕を下ろす　そうですよね？　未来さん」

「ええ、そうよ」

春奈は溜息をしながら、未来の正面までやって来て、未来を見据

えた。

「緑沢さんに、妹がいたなんて、初耳です。それに、二人とも苗字が違う」

「当たり前よ。お互い、父親が違ったもの」

それを聞いた春奈は驚いたような顔をした。

「あの二人の母親は、幼なじみの恋人がいた。けれど、親によって、所謂、政略結婚をさせられ、無理矢理その恋人と引き離された」
春奈は息を飲んだ。

「しばらくして、二人の間には、女の子が生まれた。それが秋亜」
人の生い立ちを知るのは、こんなにも恐いなんて、春奈は身震いした。

「でも、秋亜の母親は、恋人との縁を切ってはいなかった」
ごくろ、と音を発て、春奈が唾を飲み込んだ。

「四年後、母親は子供を身籠った。勿論、その恋人との間の子供よ」

「それが、梅咲さん」

未来は静かに頷いた。

「それをきっかけに、母親は正式に離婚を申し立てた。了承は取れた。けれど、秋亜の親権は取れたけれど、一つだけ、条件がついてきてきたの」

一瞬、未来は間を置いて、話を再開した。

「秋亜の苗字は、緑沢のままにしておくこと。それが条件だったわ。受け入れない場合は、そちら側に多額の慰謝料を請求する。」

そんな条件があったから、秋亜の苗字は緑沢のままだったの」
でも何で、と春奈が問い掛けた。

「多分、将来跡取りになる相手の嫁にでもするつもりだったのね。生まれた時から、許婚がいたくらいだったからね」

「……………」

春奈は、ただ静かに未来の話を聞くことしかできなかった。

「一年して、秋亜の父親違いの妹の夏美ちゃんが生まれたわ。秋

亜はそれはもう、夏美ちゃんのことを可愛がったわ。　それはもう、ウザいほどに」

途端、呆れるような口調になった未来は、懐かしそうに何かを思い出しながら話し続けた。

「いっつもね、秋亜はおんぶ紐をかけて、それで夏美ちゃんを運んで家まで来て、自慢自慢また自慢。　親バカならぬ、姉バカだったわね」

「はぁ……」

春奈はもう、そう答えるしかなかった。

「その溺愛っぷりつつたら、年々増していつて、秋亜と話していて、夏美ちゃんのことかでなかったことはなかったわ」

もはや、秋亜の姉バカっぷりの武勇伝だ。

「でも、すぐく仲のいい姉妹で、喧嘩なんかしたことがなかったわ。　家族もうまくいつてたし、幸せだったでしょうね」

やっと終わる、春奈はそう思った。

「　あの時まで」

それは、これから幸せがどんでん返してしまうときの言葉だ。
「去年の夏のことよ。　二人のご両親が乗った車に、飲酒運転のうえ、信号無視で物凄いスピードを出した大型トラックが、正面衝突してきた」

冷たい風が、春奈の全身に当たり、春奈は身震いした。

「　ご両親は即死、二人は、母親の前夫の、緑沢紅野くれの氏が育てることになったわ。　けれど、そのあとすぐ、第二の悲劇が夏美ちゃんを襲ったわ」

まだ続くか、と春奈は耳を塞いでしまいたいような気持ちだった。
「あの飲酒運転のトラック、捕まってなくて　最悪にも、それが再び、二人を襲ったのよ。　夏美ちゃんが青信号を渡っていて、そのトラックが　突っ込んできたわ。　それを庇って、秋亜は……死んだの」

つまり、夏美は今、義夫と二人で暮らしていることになる。

「夏美ちゃんは、可哀相な娘よ。あの娘は今、一人で生きているの。誰かが支えてあげなきゃ、すぐに崩れ落ちてしまう。私は、夏美ちゃんのことを、秋亜に頼まれた。だから、私はこれくらいいろいろやらなければいけないことがある」

春奈は思った、これではまるで、これから夏美に対して、エゴ贖をすると言言しているようなものだ。

「戻りなさい。このことは、誰にもいっちゃ駄目よ」

「はい」

しかし春奈は、内心では、黙っている気等、更々なかった。口が滑ったことにして、夏美を陥れようと考えたのだ。

（……それに、そんなことを軽々しく口走る未来さんにも、責任があるよね）

春奈が走り去ったあと、未来は溜息をついた。未来は予測していた、春奈が黙っている気等ないことを。春奈はあからさまに、夏美に敵意を抱いている。それは恐らく、蓮が関係しているだろうということも。

全ては未来の思惑道理。未来は軽く背伸びをし、体育館に戻って行った。

3rd・Game、終わり

4 t h ・ G a m e ・ 春奈の想いと蓮の気持ち

I n t e r v a l ・ 手紙

D e a r、夏美ちゃん

夏美ちゃん、元気にしてる？

この手紙を読んでいるということは、私は死んだってことかな。もし、私がこの手紙を読んだなら、一つ、お願いがあります。

星華学園にいる、私の親友の『未来ちゃん』を訪ねてください。

きつと、夏美ちゃんの助けになってくれるはずです。最後に一つ、一人でも、頑張つて。

F r o m、秋亜

4 t h ・ G a m e、春奈の想いと蓮の気持ち

「突然だけど、来週の土曜日、他校と練習試合をすることになったわ」

未来がそんなことを言い出したのは、五月の半ば頃だった。

新人生もシャトルを使った練習に入り、まともに打ち合いができるようになるまで上達していた。

「相手校は 笹山大附中」

「！」

一番驚いたのは、やはり夏美だった。

「あの……それ、絶対参加ですか？」

「余程の理由がない限りね」

「ですよ」

夏美は諦めたように肩を落とした。

「で、その試合のために、一年生の組を決めようと思うわ」

「つまり、シングルのダブルスカ、ってこと？」

蓮がスクワットをしながら訊いた。因みに、蓮が何故、スクワットをしているかというと、練習に無断で遅れて来たからだだった。

「新入生は十五人。シングルのダブルスは、半々に分けるわ。」

一応、希望は取るけれど、私と本田君が適正を見て決めるわ」
サブ・キャプテン

未来と秀一は、テキパキと希望を取っていき、その後、十五分ほど、話し合い、あつという間に適正を分けてしまった。

「春奈ちゃん、シングル！」

「はい」

十三人が既に分けられ、夏美と蓮の二人が残された。

「で、残りの二人だけれど、あなた達には、ちよつと変わったことをしてもらうわ」

「？」「？」

夏美と蓮は、一斉に疑問符を浮かべた。

「混合ダブルス」

二人の思考は、一時停止した。

「え？ 混合ダブルス？ 男女二人でダブルスする、あの？」

「それ以外に何があるの？」

辺りの部員も啞然とし、夏美と蓮も、開いた口が塞がらなかった。
「以上」

未来は有無を言わず、女子部員と打ち合いを始めてしまった。
「どうぞ」

呆然と立ちすくむ二人に、秀一は一冊の冊子を蓮に手渡した。

「混合ダブルスについての資料です。有効に使ってくださいね」
それはまるで、予めこうなるのが決まっていたようだった。

「と、とりあえず、練習しようよ。蓮君は、ダブルスの経験、ある？」

いち早く思考を回復させたのは、当然のことながら夏美で、蓮も夏美の言葉で思考を回復した。

「またつつつた、ない」

言い切った、見事に言い切った。

「私は女子ダブルスは何回かやったこと、あるけど……流石さすがに混合ダブルスはないな……」

「姉貴のヤツ、何のつもりだ？」

蓮は腕を組み、うーんと唸りながら、考え込んでしまった。

「本田先輩にもらったこの資料、使ってみようか？」

「ああ」

夏美が蓮に冊子を渡す時、二人の指先が、微かに触れた。

ドキン……！

「あ……」

それに気付いた蓮は、微かに頬を赤らめた。

「どうしたの？」

夏美に気にしている様子は見られず、蓮はびみょーに凹んだ。

「ちょ、ちょっとトイレ、行ってくる！」

このままでは赤面しているのが夏美にバレてしまいそうで、慌てて蓮は夏美の目の前から逃げ出した。

そんな二人の様子を、春奈はやはり、冷たい目付きで見つめていた。

どうしたんだ、俺？

蓮は体育館のトイレで、身体の中の熱を冷ますため、冷たい水で、顔を洗っていた。

あの時確かに、

蓮の心臓は、ドクドクと、素早く動いていた。あの時、俺の心臓は、ドキン、っていう確かな音を発てて、高鳴ったんだ。」「梅咲さん、私と試合をしましょ」

蓮がトイレに走り去ったすぐあとだった。春奈は突然、夏美に試合を挑んだ。

「え、いいけど……」

夏美も承諾し、主審は未来が引き受けてくれた。

（勝てないなんて、始めからわかってる。けれど、この試合は、勝つためにやるんじゃない）

この試合は、自分の気持ちにケジメをつけるためにする。春奈の意志は、強かった。

（この試合が終わって、一緒に帰る前　蓮に告白する）

春奈は目を閉じ、精神を統一させた。

「……よろしくお願いします」

「こちらこそ」

二人は軽く握手をし、コートに入った。

「ファーストゲーム、ラブオールプレー」

トスじゃんけんでは、夏美が勝った。試合というものは、既に

この時点で始まっているのだ。

「お手柔らかに、梅咲さん」

「楽しくやろうよ」

春奈は笑わなかった。

「一本」

「カット」

夏美は大きくサーブを打ち込んできた。シャトルは綺麗な弧を描き、春奈側のコートのラインギリギリに落ちてきた。

パシン！

春奈はそれを打ち返し、すぐに中央に戻った。

パシ。

すると今度は、夏美は小さくヘアピンで返してきた。

春奈は同じくヘアピンで返すと、夏美にドライブ（ネットギリギリを、スマッシュに近い感じで強く打つ技）を打たれた。シャトルは春奈の脇を抜け、春奈のすぐ後ろに着地した。

「イン、ポイント・1-0！」

やはり強い、と春奈は内心で思った。春奈は所詮、関東大会止まりで、相手の夏美は国際大会優勝。実力の差は見るまでもなかった。

（蓮が強い梅咲さんに憧れのような気持ちを抱く気持ちもわかる。

でも、それは憧れなんかじゃない）

夏美のスマッシュが体育館の床を打った。

（蓮はもう、梅咲さんのことを、好きになり始めてるんだよ …）

結果は、夏美の圧勝だった。十一點入れられたところで、試合は未来により強制終了させられた。その間、春奈は自分の存在の小ささを、改めて思い知らされた。

「ありがとう、ございました」

悔しかった。自分が全てにおいて、夏美に衰えていることが悔しくて、認めたくなかった。

（上には上がいる）

それは、当然のことだった。

「春奈ちゃん」

未来は優しく微笑んだ。

「これから、頑張りなさい」

泣きたかった。けれど、己のプライドがそれを許さなかった。蓮は今、夏美と楽しそうに話している。春奈には見せないような笑顔で。その日の部活は、春奈を少しだけ、大人にした。

「蓮」

「ん？」

「話があるの。来て」

部活終了後、春奈は蓮を体育館裏に連れ出した。

「何だよ？」

いざとなると、なかなか言い出せず、春奈は身を縮めた。

「……私」

勇気を出せ、春奈。心の中で叫んだ。

「蓮が好き……」

やっと、言葉になった。春奈はそのまま蓮に抱き付き、蓮の胸元にうずくまった。普段の様子からは想像もつかないほど、蓮はしっかりとした筋肉質だった。

「……何か、言ってよ……」

「……」

蓮は黙ったままだった。

「……ごめん」

蓮の口から出てきた言葉は、拒否の言葉だった。

「俺、桜のこと、そういう対象には見えない」

春奈が思ったとおりの返事だった。

「……だよね」

春奈は無理に笑って見せた。

「ごめん」

「謝らないで」

蓮とは今の関係を保っていたかった。

「一つ、聞いてもいい？」

勿論、夏美のことだ。

「梅咲さんのこと、どう思ってる？」

蓮は予想外のことを突かれたらしく、ひどく驚いていた。

「ど、どうって！ 友達だよ、友達！」

明らかに動揺している。 そんな蓮を見て、春奈は少し、笑った。
「私じゃない誰かさんとお幸せに！」 それは、せめての皮肉だった。 誰かさんというのは勿論、夏美のことである。

「じゃ、今日は一人で帰るわ！ また明日ね」

逃げるように、春奈は、蓮の前から逃げ出した。

走っているうちに、必死に抑えていた涙が溢れてきた。

「馬鹿ヤローー！」

春奈の言葉は、沈みかけた夕日に向かって木霊した。

4 t h ・ G a m e 、 終 わ り

5th・Game・悪夢の練習試合

5th・Game・悪夢の練習試合

練習試合当日。

「あと三十分したら、笹山大附中が来るわ。アップは終了したから、コート張り等の準備を手分けしてやるわよ」

「はい！」「」「」

各々自分の担当に散り、夏美は、蓮、春奈と一緒に、コート張りをしていた。

「蓮君、ネット、もっと引っ張って！」

「おう！」

夏美と蓮の距離は、混合ダブルスの練習で、少しずつだが、縮まっていた。

「あら。笹山大附の人、もう来たわ。時間まであと、十五分もあるのに」

未来のその言葉を聞いた途端、夏美の顔が強張った。夏美は笹山大附の話が話題に出る度に、逃げるようにその場を離れていた。

「失礼します」

入って来たのは、白の生地^{いしだ}に黒のストライプが入ったジャージを着た、男子生徒だった。

「笹山大附中バド部キャプテンの石田です」

「星華学園中等部バド部のキャプテンの宝木です」

全員、集合！と未来が号令をかけ、部員は全員、入口の前に二列に別れて並んだ。

ぞろぞろと、笹山大附中の生徒たちが、体育館に入ってきた。

一人、また一人と入ってくる度に、夏美の顔は、どんどんと強張っていった。そして、最後に入ってきた女生徒の顔を見た途

端、その緊張はピークになった。

「梅咲っていう生徒、いるー？」

その女生徒が言った。夏美は、逃げるように、隣にいた蓮の後ろに隠れた。

「梅咲？」

女生徒の視線が、夏美を捕らえた。

「梅咲、見つけた」

女生徒は夏美を指差し、スキップをしながら歩み寄ってきた。

「笹山礼花……！」
ささやまれいか

夏美は、らしくない怖い顔で、彼女を見つめた。

「ひっさしぶりい！」

その時、決定的な出来事が起きた。

ダンッ！

女生徒のラケットケースが夏美の身体を打ち、その反動で、夏美が勢いよく倒れ、床に強く叩きつけられたのである。

「ごつめーん、『当たっちゃった』」

明らかにわざとの行為だった。

夏美は、何かを堪えるように、唇を噛み締めていた。

「れ、礼花君！ 何をしているんだ！？」

相手のキャプテンが止めに入ろうとするが、礼花と呼ばれる少女は止まらない。

「そおー言えばあ、『右肩の調子はどう』？」

夏美の顔が、ひどく強張った。

「全治半年だっけ？ その右肩の怪我」

礼花は不気味な表情で微笑んだ。

「……………」

「何か言ったら？」 我慢すればいい、自分が全てを我慢すれば、

それでいい。私の事情に、他人を巻き込みたくない。

夏美はますます唇を噛み締めた。

「何か、言いなさいよ！」

次の瞬間だった。

バシンッ！

礼花の掌が、夏美の頬を強く打ったのだ。

「なっ……！」

倒れた夏美を、蓮が慌てて支えた。

「何し……、」

「いい加減にきなさい！」

叫ぼうとした蓮を抑えて、叫んだのは、未来だった。

「他校の選手相手への暴言に暴力。そんなこと、正式な試合でしてみなさい！ 立派な退場理由になるわよ！ それにキャプテンもキャプテンよ！」

未来は石田の目の前に立ち、遂には仁王立ちになった。

「たった一人の部員すら、言うこと聞かせられないわけ！？ 今にも一触即発の雰囲気だったじゃないっ！ 実際に今、一方的に暴力を奮ったじゃない！」

石田は未来の迫力に押され、ただペコペコと謝ることしかできなかった。

「最後に、あなた！」

その怒りの矛先は、礼花にも向けられた。

「あなたたちの学校で、夏美ちゃんがどういう扱いされてたか、知らないけどね、ここはあなたたちの学校じゃない！ 夏美ちゃんはもう、うちの生徒なの部員なの！ 例えどんなことがあるうが、侮辱することは許さないからねっ！！」

しかし、礼花は聞く耳を持たないとばかりに、再び夏美に接近する。

礼花が夏美の右腕を思いつきり引こうとしたその時、
「やめろよー！」

近くにいた蓮がさかさず夏美の身体を引きよせ、抱きすくめた。

「……てか、あんた馬鹿？ 泣いてないじゃん。それにかつこよく決めたつもりだろうけど、ぜんっぜん、かつこよくないから！」

[illegible]

「カツコ悪い上等！　んなの昔から、姉貴に言われまくって慣れちまってるんだよ、こっちは！　じゃなくて、俺が言いたいのは、人が傷つくようなことをするな、ってことだよっ！」

「何よ？」

キャプテンの静止がやっと入り、礼花は不貞腐れながら二人から離れて行った。「ったく……、もう、大丈夫だかな、梅咲」

蓮は自分が夏美を抱きしめていることを忘れていた。

$$\begin{array}{c} \neg \\ \vdots \\ h \\ ? \\ \neg \end{array}$$

「……どわっ！」

「いじめん」

夏美は未来の方を見て、頭を下げて、御礼を言った。

「ありがとうございました。感謝します。ところで、お手洗いに行ってきたもいいですか？」

「……いいわよ」

夏美は再度未来に御礼を言い、走り去ってしまった。

その時、蓮は気がついてしまったのだ。夏美が泣いていたことに。

「姉貴！ 俺も便所！」

「こらっ……！ 待ちなさい、蓮！」

と、未来が言うのも空しく、蓮は瞬く間に走り去ってしまった。

「まったく……あの馬鹿は死んでも直らないわね」

未来は呆れた様子で嘆息した。

気持ち悪い、吐き気がする。 何で、いつもこうなるんだろう。

「うっ……うっ……」

涙が出てきた。 いけない、泣かないって、決めていたのに。

「 梅咲？」

「蓮君？」 女子トイレの入口に、蓮が申し訳なさそうに立っていた。

「 見ちゃったんだ。 梅咲が立ち去る時 泣いてたの」

見られてたか、と夏美は思った。

「何かさ、辛いことがあるなら、俺に話してくれよ。 少しは、楽になるかも、知れないぜ？」

蓮は、トイレの入口でモジモジとしている。

「だから」

しかし、蓮は最後まで言葉を続けることができなかった。

「 梅咲？」

夏美が、蓮の身体に抱き付いていた。

「うつ……」

泣いていた。まるで幼い子供のように、泣いていた。

「あの人は、笹山礼花。　笹山大附中の理事長の娘」

夏美は、少しずつ、過去を語り始めた。

昔、笹山大附小にいた時、彼女に徹底的なイジメにあい、ひどい目にあつたこと。　彼女が理事長の娘だから、誰も助けることができず、いつも一人だったこと。　両親と姉が、交通事故で死に、それを幾に、星華に來たこと。　全てを、素直に話してくれた。

「私ね、本当は右でプレーしてたんだ」

それは、恐らくラケットを持つている方の腕のことだろう。

「元々両利きでね、右がやりやすいから右でやってただけ」

夏美は、右肩を優しく撫でた。「一月、卒業の二ヶ月前に、彼女に右肩を徹底的に痛め付けられた。　壊れはしなかったけど、全治半年。　絶望のどん底に落とされたような感じだったよ、本当に」
夏美が右腕ではなく、左腕でプレーでしていた理由が、蓮もやっと理解できた。

「私ね、何度も死にたいって、思ったことがあるよ。　でもね、お姉ちゃんがいてくれたからよかった。　庇ってくれて、励ましてくれた。　お姉ちゃんが死んでから、独りで寂しかった」

再び、泣きくのを我慢する声が、聞こえてきた。

「星華は、暖かい場所だね」

「そうだな」

蓮は、無意識のうちに、夏美を抱きしめていた。

「潰し合うこともなくて、誰もが助け合って、みんなで笑って私が、ずっと求めてた世界だった」

心が暖まるような、日だまりのような世界　。

「ありがとう、少し、楽になったよ。　戻ろう？」

「ああ」

夏美は蓮の腕の中からするりと抜け出すと、向き直って、笑って見せた。

また、蓮の心臓が、ドキン、と高鳴った。

「ありがとう」

「俺でよければ、いつでも相談に乗るよ」

（ああ、そうか、鈍いから気がつかなかった）

蓮は自分の胸に手を当てた。

（俺、梅咲のことが、好きなんだ　　）　　気付いてしまった以上、もう、友達として見ることは、できない。

（どうせ、フラれるなら、めいいっぱい、笑おう）

蓮は、はにかみながら、笑って見せた。

その顔を見て、夏美の頬は微かに紅潮した。

（何でだろう）

夏美は時々不思議に思う。

（私とあまり変わらない背丈なのに　　）

彼の背中は、とても大きく、そして逞しく見えた　　。

「しかし、相変わらずだな、笹山のヤツ」

「ホント、あんなだけやったのに、まだ梅咲さんにひどいことする気かな？」

「人間のすることじゃねえな」

夏美と蓮が去ったあとの体育館は、騒然としていた。

笹山大附中の生徒たちが、先ほどの二人のやり取りを見て、騒ぎ出したのだ。

「ねえ、ちよつと」

その中、春奈は一人の笹山大附中の生徒に接触してた。

「小学生時代の梅咲さんのこと、教えてくれない？」

春奈は笹山大附の生徒達を数人、連れてくると、夏美の過去について語らせた。

「梅咲さんって、笹山礼花に徹底的にイジメられてたよね」

「どうして？」

「どうして、って……」

笹山大附の生徒達は、悩んだあげく、全てを話してくれた。

「去年、中学生の全国大会で優勝した、緑沢秋亜って、知ってる？」

一年生以外は、全ての部員が知っていた。

「梅咲さんって、緑沢先輩の異父姉妹なのよ」

「梅咲さん、緑沢先輩に、すごく可愛がられてたから」

「緑沢先輩に憧れてた笹山さんは、梅咲さんのこと、気に喰わなかったんだな」

そして、夏美の両親や緑沢秋亜は、半年前に交通事故で亡くなっ
てしまったらしい。

「今は母親の前夫のところにいるらしいよ」

「あとね、卒業の二ヶ月前、梅咲さんがうちを出る、決定的な出来
事があったの」

未来は顔を顰めている。 全てを知っている身として、このまま
全てを語らせていいのか、と悩んでいた。

「笹山さんが、梅咲さんの右肩を徹底的に痛め付けたんだ」

「壊れなかったものの、全治半年。 梅咲さんが、両利きの選手じ
やなきや、選手生命も危なかったよ」

真実を知ってしまった部員達は、しばらくの間、騒然としていた。
「……ひどい」

一人の女子部員がそう言うと、次から次へと抗議の声を上げた。

「んなの、ただの八つ当たりじゃん！」

「私だったら、我慢できない」

「あんたらも、どうして助けなかったんだよ!？」

怒りの矛先が、笹山大附の部員にも向けられた。「だって、笹山
礼花は理事長の娘だから、何されるか、わかんねえんだよ!」

「梅咲さんも、怪我のことについては連盟に訴えたみたいだけど、
結局全部揉み消されて、事故ってことで片付けられちゃったんだか
ら!」

これには、星華の部員も返す言葉すら、なかった。

「楽しそうねえ、あなた達」

笹山大附の生徒が固まった。

「こんなことして、ただで済むと……」

「済むよ」

夏美の、しっかりとした意思のある声が聞こえてきた。

「梅咲！」

「決着を、つけましょう」

夏美は、ラケットで礼花を指していた。

後ろでは、蓮が心配そうに夏美を見つめていた――

5 t h ・ G a m e、終わり。

5th・Game・悪夢の練習試合（後書き）

い。今、Final・Gameを執筆中です。今しばらく、お待ち下さい。
(1~3)

F i n a l ・ G a m e ・ 私 の 居 場 所 (前 書 き)

これは長いです。覚悟して読んでください。

Final・Game・私の居場所

Final・Game・私の居場所

「決着をつけましょう、笹山礼花」

「試合でもするの？」

礼花は不気味な笑みを浮かべている。

「私が勝ったら、今まで私にしてきたこと、全部謝って。そして、もう無駄に私に鑑賞してこないで！」

そして、夏美は笹山大附の部員を見た。

「最後に、二度と私の二の舞になるような人が出ないようにして！」
それを聞いた礼花は、再び不気味に微笑んだ。

「いいわ。私とあなたの試合を、練習試合の中に組み込んでもらえように頼んであげる」

ただし、と礼花は、続けた。

「あんたが負けたら、うちに戻って来てもらうわよ。それに、実力の差は明らかなんだから、ある程度のハンデも負ってもらうわよ」
次に、礼花は衝撃的なことを言った。

「あんたには、右でプレーしてもらうわよ」
「！」

夏美の怪我を知っての、わざと夏美が不利になるハンデだ。
「できるわよね？」「……わかった」

夏美の意志は堅かった。

「試合は、最後の方に入れてもらうわ。それまでせいぜい、あがいてなさい」

礼花は笑い声を上げながら、後ろを向いて行ってしまった。

「梅咲！」

走り寄って来たのは、蓮だった。「あんな条件、無茶苦茶だった！」

「大丈夫。リハビリもしてるから、ある程度はできるの。……」

それに、彼女は自分が不利になる条件を出してしまったの」

「……え？」

夏美は、軽く肩を回して見せた。

「思ってたより、治るのが早かったの」

「それって……」

「うん、予定より早いけど、完治したの」

夏美は、思いつきり笑った。

「それに、私は両利きだけど、右でプレーすることが多かったから、右でやる方が上手くできる」

「つまり」

夏美は、安心しろと言わんばかりに、蓮に微笑みかけている。

「私の方が、圧倒的に有利よ」

夏美は、始めから、このことを計算に入れていたようだ。

「だから安心して」

最後の笑顔は、極上だった。蓮は、思わず赤くなった顔を隠すため、後ろを向いた。

「……梅咲！」

「？」

蓮の心臓は、今にも破裂しそうだった。

「これが終わったら、試合、しようぜ」

「いいよ？」

「そのあと、話があるんだ！」

もう、自棄糞だ。

「が、頑張れよ！」

「うん！」

夏美は、中断されていた準備をするため、行ってしまった。

「青いわね」

未来の声で、蓮は心臓が飛び出しそうになった。「何であそこで、
びしっと、告白しないかな」

「仕方ねえじゃん」

蓮は、バクバクと音を発てて動いている心臓に手を当て、言った。

「死ぬぜ、あのまま言ったら、心臓が破裂した」

「まだまだ青いな、蓮坊は」

そこに、突如として現れたのは、夏矢木先生だった。

「約一時間の遅刻です、夏矢木先生。顧問の先生が、練習試合に
遅れてくる何て、どういっつもりですか？」

未来の標的にされてしまったようだ。

「大体あなたは昔から、適当過ぎなんですよ！ 大人になって、教
師になったっていうのに、何で相変わらず、マイペースなんですか
？」

未来は睨んではないものの、思わずビビってしまうような気迫
が、未来の身体からそんな感じのオーラが出ていた。

「まあまあ、落ち着けて、それより蓮坊、これから俺が、女を落
とす、テクを伝授してやる」

「！」

蓮は夢中になって食い付いた。

「馬鹿」

そこで未来がそう言ったが、蓮には聞こえなかった。

「あんな、女を落とすには――……」

「うんうん」

「根性だ！」

次の瞬間には、蓮がひっくり返っていた。

「ま、頑張れや」 呑気に手を振って、夏矢木先生は、笹山大附中
のバド部の顧問の先生のところに行ってしまった。

「うう……ひでえ」

蓮が半分泣きそうな声で言った。

「あの人を信じたあんたが悪い」

「だって、俺はもう、玉砕覚悟で告らないといけないんだぜ？ もう、藁にもすがる思いなんだよ」

蓮にしては、珍しく弱気だった。

「あーもう！ うじうじうじ鬱かしい！！ もう、当たって砕けなさいよ！」

「砕けちゃ駄目だー！」

蓮は何を思ったのか、なぜかその場からランニングを始めた。

「やっぱ、馬鹿だね。 あんなのと姉弟だと思つと、情けなつてくるわ」

未来も頭を抱えながらも、何とかその場から立ち上がり、なぜか走っている蓮を見て言った。

「強くなりなさい、蓮。 あんたならできるわ、私の弟なんだから」

そして練習試合終盤。

「次の試合ね、夏美ちゃん」

「はい」

夏美と礼花との試合まで、あと、一試合。

「星華の梅咲さん、準備してください！」

「はい」

夏美は未来の元を離れ、アップを始めた。

「う、梅咲！」

「？ どうしたの、蓮君？」

「そ、その……」

蓮は恥ずかしそうに、モジモジとしていた。

「が、頑張れよ！」 やつとの思いで出てきた応援の言葉は、夏美の心にも届いたらしく、うん、と元気な声で、返してくれた。

「頑張るから、応援してね」

「も、もちろん！」

夏美は最後に、笑顔で手を振ってくれた。
蓮の想いは、募るばかりだった

「それでは、ただいまより、笹山大附中・笹山礼花さん対、星華学園・梅咲夏美さんの試合を始めます」

お願いします、と挨拶をしたあと、二人はトス・じゃんけんをした。

「相変わらず、『運だけ』は強いんだから」

じゃんけんで負けた礼花は、まるで、負け惜しみのようなセリフを吐いた。

「練習してください」

審判にそう言われ、夏美達は、打ち合いを始めた。

「痛いでしょ、右肩」

「……まあね」

しばらく打ち合いをすると、主審から静止がきた。

「オンマイライト、梅咲さん。 オンマイレフト、笹山さん。 梅咲さん、トゥーサーブ、 ファーストゲーム、ラブオール、プレー」

「お願いします」

試合が、始まった。

「一本！」

「カット」

夏美は、いつもと違うサーブを打った。

「低い！」

蓮が叫んだ。

夏美が打ったサーブは、いつもみたいに綺麗な弧を描いて高く上がるサーブではなく、ネットギリギリの低く、早いサーブだったのだ。

「すごい」

蓮が素直な感想を漏らした。

「そうね。でも、注意も必要よ?」

「注意?」

蓮が未来に問うた。

「オーバー・ザ・ウエストよ」

「ああ、あのサーブをする時、ラケットがウエストより高い状態で打つと、フォルト（反則）なんだろう?」

そ、と未来は答え、続けた。

「あのサーブはね、速いサーブに慣れてない人には有効だけど、もし速くても取れる人に当たったら、逆にリターンのスピードも速くなるし、さっき言ったとおり、フォルトもとられる可能性があつてやる側のリスクが大きすぎる。そして、あのサーブの仕方は、やる側がフォルトを取られない自信があつて、なお、かなりの技術がないと、できないわ」

「……………」

蓮は黙っている。

「見ていなさい、蓮。夏美ちゃんは、国際大会のチャンピオンよ。あんたは、あそこを目指さないといけない。だから、見ておきなさい」

「俺は……」

蓮が、ゆっくりと話し出した。

「俺は、梅咲見たく、強く慣れないかもしれない。つーか、無理でも、一生懸命練習して、強くなる……」

未来は、ふつ、と笑って、言った。

「その意気よ、蓮」

（やっぱり、強いわね） 礼花は、夏美を見据えながら思った。
（インターバル（休憩時間）に対策を考えなきゃ）

「イン、ポイント・11-5！ インターバル」

バドミントンは21ポイント制で、1ゲーム毎に、11ポイントになると、九十秒間のインターバルが入る。

礼花は、夏美を見た。

夏美は今、顧問の夏矢木先生にアドバイスを受けていた。

「ちよつと」

礼花は一人の笹山大附中の生徒を呼んだ。

「……何ですか？」

「ちよつと、頼みがあるのよ」

「え……？」

「プレー」

インターバルが終了し、夏美はコートでラケットを構えた。

早めに決めないと、自分が不利になる。

「一本！」

今度はショート・サーブ（大きく打つと見せかけて、前のラインギリギリにシャトルを落とすサーブ）を打った。

礼花はそれを打ち上げ、下がった。

その時、夏美は気がついてはいなかったが、礼花は、笑っていた。

夏美は、それをドロップ（クリアのシャトルを、ネット際に落とす技）でそれを返した。

すると礼花は、それをヘア・ピンで返した。

「あ……！」

夏美がそれを返そうとした瞬間、隣のコートのシャトルが、夏美側のコートに入ってきたのだ。夏美は自分達が打っているシャトルを大きく返すと、飛んできたシャトルを、そのコートに打ち返した。

本来なら、他のコートのシャトルが乱入した時点で、レット（無効）になるのだが、礼花はプレーを止めなかった。

礼花は、上がったシャトルを、夏美目掛けて打ち込んだ。シャ

トルはスマツシュとなり、夏美の顔目掛けて飛んでいく。

「え……？」

その時、夏美が振り返った。

「！」

シャトルは、夏美の右の上脛に当たった。シャトルが上脛を掠り、血が滲み出る。

夏美は、右目を押さえ、その場にうずくまった。

「梅咲！」

蓮が夏美の元に走り寄った。

「血、出てる！ バ、バンソウコウ！ や、包帯か！？」

「どっちでもいいわよ！ 本田君！ 部室に救急箱があるはずだから、急いで持ってきて！」

秀一は無言で頷くと、部室に走って行った。

「血、血、血イ！」

「落ち着きなさい！ 脛は切れると、血が多く出るだけよ！ それより夏美ちゃん、目に当たらなかった？」

夏美は静かに、はい、と言った。

「ごめんなさいねえ」

全員が、一斉に礼花を見た。

「ほおらあ、車は急に止まれないっていうしい、振りがぶつてたからあ、止まらなかったのよあ」 礼花がわざとやったというのは、誰もがすぐにわかった。

「でもお、このままじゃこの試合、中止になちゃうわねえ。そしてたらあ、賭も無効よね？」

（こいつ……！）

蓮ははらわたが煮えたりそうになった。

「できます」

秀一に応急処置をしてもらっている夏美が、静かに言った。

「私、できます」

「無茶だって！」

蓮が慌てて静止に入った。

「大丈夫……」

それでも夏美は、譲らなかった。

「賭のことなら心配するなよ！　俺が、俺が何とかするから！　俺が守るから！」

蓮は、ここに大勢の生徒がいるのを、忘れてしまっていた。

「だから、お願いだから、無理するなよ……！」

恐らく全員が、

「どこの青春漫画だよ！」

と、心の中でツツコミを入れただろう。

「……ありがとう、蓮君。でもね、これは私自身の戦いでもあるの。だから、やらせて。心配しなくても、すぐに終わらせるから」

「梅咲……」

夏美はゆっくりと立ち上がり、怪我の手当をしてくれた秀一に御礼を言い、コートに戻った。

「で、では。先ほどのをレットとし、11-5から試合を再開します」

夏美は軽く、右の上脛に触れてみた。血は止まっているが、微かに腫れ、視野も悪い。それでも、礼花が嬉しそうに笑っていたのは、すぐにわかった。

「一本！」

本当は、泣きたかった。けれど、泣けなかった。自分の弱さを、人には見せられなかった。

夏美は、根真の力を込めて、シャトルを打ち込んだ。

シャトルは、上がって上がって、オーバーラインギリギリに落ちてくる。礼花はそれで、ジャッチ・ミスをした。

シャトルは、ライン上に落下した。

「イン、ポイント・12-5」

礼花が夏美を睨んだ。

夏美は微動だもせず、礼花を見返している。
(一気にいくわよ……)

それから夏美は、順調にポイントを重ねていった。

「イン、ポイント・20ゲーム・ポイント・17!」

そして、最後のポイントまで、礼花を追い詰めた。

「ラスト、一本!」

蓮が叫んだ。

ほかの星華の部員も、あとに続いた。

「いけー!」

「頑張れ!」

それを聞いた夏美は、嬉しいような、恥ずかしいような、複雑な気持ちになった。

一方礼花は、焦りを隠せなかった。

先ほどのシャトル乱入は、礼花が仕組んでいたもので、逆らえないことをいいことに、試合中に、わざとシャトルを乱入させていたのだ。これで試合は無効 になるはずだったのだ。

しかし、期待に反して夏美は試合を続けた。おまけに、右肩を痛めているはずなのに、そんな様子は一切見せずに、夏美は試合をしている。

これは、どういうこと?

あと一ポイントで、自分は負けてしまう。 所したら、賭は夏美の勝ちになってしまう。

「カット!」

いい気になるんじゃないわよ、梅咲夏美。 あんたなんか、勝たせてたまるもんですか。

こうなったら、徹底的に潰してやる。 もう、バドミントンをやる気なんて、起こらせないようにしてやる。

礼花は、再び卑劣な作戦に出た。

夏美は、シャトルを大きく打ち上げた。

シャトルは綺麗な弧を描き、伸びていく。

礼花は、それをスマッシュで返してきた。

シャトルは、夏美の顔目掛けて飛んでくる。

咄嗟に、夏美はラケットを顔の前に出した。

カンッ！

シャトルはラケットのフレームに当たり、コートの外に出てしまった。

「フォルト（今回の場合、シャトルがネットに引っかけたり、インでもアウトでもないものこと。ミスした人の相手側に、ポイントが入る。）！ポイント・18 - ゲームポイント。サービス・オーバー」 礼花は、作戦があまりに上手くいったので、つつい笑ってしまった。

「やられたわね……」

未来が言った。

「身体、狙うなんて、卑怯だ！」

蓮は大分憤慨していた。

「いいえ、この場合は正当よ」

「何で！」

あまりに冷静に言う未来に、蓮がキレた。

「スマッシュは『身体を狙え』って教えるところは、少なくともわ未来はきっぱりと言い切った。

「大抵のところは、『脇を狙え』とか、『足下を狙え』って教えるけど、一部ではわざと身体を狙わせる場所があるわ。理由は勿論、その方が取りにくいから。バドはテニスとかと違って、当たっても相手が大きな怪我をする可能性も少ないしね」

「……………」

蓮は黙り込む。

「これが『試合』なのよ、蓮」

未来は蓮を見ずに言う。

「どんな手を使ってでも、勝たなきゃいけない。それが試合。勝つ者がいれば、負ける者もいる。それが、『勝負』。それを理解しなさい、蓮」

クソ、と蓮が言った。

「黙ってみてなさい。夏美ちゃんは今、戦ってるのよ。だから夏美ちゃんを、応援しなさい」

蓮は、コートを見た。

夏美が、スポーツタオルで汗を拭っていた。

真剣な顔で、試合をしている。「見届けなさい。この試合の結末を」

蓮は静かに、頷いた。

「カット！」

夏美の体力は、周りが思っているほど、多く残ってはいなかった。元々体力が少なく、貧血気味の夏美は、長時間の試合が苦手だった。

なので、夏美の試合はいつも、即効制があるものだった。

おまけに、完治しているとはいえ、まだリハビリ中の右肩でプレイするのは、かなりキツかった。

あと、一ポイント。夏美は、気合を入れ直した。

「一本！」

「カット！」

礼花がサーブを打った。

夏美はそれをクリアで返し、礼花もまた、クリアで返した。

最後のラリーは、長かった。

五分はしたろうか、礼花が遂に、ミスをした。

シャトルを、ネット際に打ち上げてしまったのだ。

夏美は、ジャンプをして、その勢いで、スマッシュを打った。

「ジャンプ・スマッシュだ！」

蓮が叫んだ。

シャトルは通常のスマッシュより、急な角度で、なお速く、コートに着地した。

「イン！ ポイント・21-18！ ゲーム！」

二人は、ネット際に集まった。

「この試合、二十一対十八で、星華学園、梅咲夏美さんの勝ちです」

「ありがとうございました！」

そして、試合は夏美の勝ちで終わった

「おい、梅咲が勝ったんだから、謝れよな！」

「わ、わかってるわよ」

試合後、蓮が礼花に迫ると、礼花は渋々と夏美の元に向かった。

「梅咲！ 殴るでもなんでも、好きにしなさいよ！」

「本当？」

そうよ！ と礼花が怒鳴ると、夏美は礼花の前に来て、手を振りかぶった。

そして

ピン。

「痛い」

夏美はなんと、礼花の額にデコピンをただけで済ましてしまったのだ。

「はい、終わり」

「これで！？」

礼花は驚愕の声を上げた。

「これでいいの。全部水に流す。それで、おしまい」

礼花は、開いた口が塞がらなかった。

「これから、ライバルとして、お互いガンバろ？」

そして、夏美は微笑んだ。

「……わかったわよ」

そして、最後に二人は、硬く握手をした。

「夏美ちゃん」

「未来さん」

すると、未来がやってきた。

「あなたに渡さなきゃいけない物があるわ」

そして、未来は一通の封筒を渡してきた。

「これは……？」

「秋亜からの手紙よ」

「！」

夏美は急いで、封筒の封を開けた。

「秋亜はね、私にも手紙を残していたの。もし自分が死んだら、

夏美ちゃんを頼むって。それと、夏美ちゃんに会えたら、その手

紙を渡してほしいってね」馬鹿よね、と未来は呟いた。

「本当はもっと早く渡すつもりだったんだけど、なかなか機会がなくてね」

夏美が封を開けた封筒からは、二枚の手紙と、一枚の写真が出てきた。

『D a e r、夏美ちゃん。』

この手紙を読んでいるということは、無事未来ちゃんに会えたということですね。

夏美ちゃんは偉いから、私の頼みを聞き入れてくれるって、信じてました。

以前に星華に行った時、とても暖かい場所だと思いました。

だから、夏美ちゃんにも来てもらいたかったの。

夏美ちゃん、今まで一人でつらかったよね？ でももう大丈夫。

夏美ちゃんは今も、一人じゃないよ。

ここにはもう、沢山の仲間や、友達ができたでしょ？

夏美ちゃん、いつも一人で泣いてない？　つらかったら、我慢しなくてもいいんだよ？

夏美ちゃん、お願い、泣かないで

天国より、秋亜。』

手紙を読み終える頃には、夏美は泣いていた。

今まで我慢してきたもの、悲しいこと、全てが涙として、流れてきた。

そして、手紙と一緒に同封されていた一枚の写真

「優しそうなご両親ね」

未来が言った。

写真には、ユニフォーム姿の、夏美と秋亜と、両親が写っていた。そして、写真には、カラフルなペンで、いろいろ書き込まれていた。

『父・春樹。^{はるき}　母、冬美。^{ふゆみ}　長女・秋亜。　次女・夏美。　家族の前は、四季です。　季節は一つでも欠けてはいけません。　いつまでも一緒！』

「……この写真は、両親が交通事故で亡くなる一週間前に、みんなで市民体育館に行った時のものです。　その一週間後、両親は亡くなりました」

あの時はまさか、こんなことになるなんて、思いもしてなかった

「夏美ちゃん。　私は秋亜にあなたのことを任された。　親友の頼み事だもの、絶対に守るわ」

未来は、夏美を軽く抱きしめると、頭を撫でながら言った。

「秋亜があなたに教えられなかったこと、全てを私が変わりに教えてあげる。　秋亜が教えられなかった暖かさも、全部」

「はい……」

夏美は泣きながら応答した。

「これからみっちり鍛えてあげるから、覚悟しなさいね？」

「はい……って、あれ？」

ちゃっかりとしたことを言われ、夏美は拍子抜けした。

「いいわね？」

「は、はい……」

顔は笑っていたが、未来の声音は、夏美に有無を言わせなかった。
「蓮！」

未来が、突然思い出したように叫んだ。「夏美ちゃんを、保健室に連れて行きなさい」

「おう！」

待ってました、と言わんばかりに、蓮は夏美の手を取り、歩き出した。

夏美の心は、嵐が去ったあとの空のように、晴々としていた

エピローグ・そして、告白

「えーと、氷、氷……」

保健室に着くと、蓮は夏美の上瞼を見て、

「わ！ 腫れてんじゃん！」

と、仰天し、慌てて氷を探し出した。

土曜日なので、保険医もいなく、今は夏美と蓮の二人つきりである。

「あつたあつた！」

蓮はなんと、冷凍庫に入れてあつた、ペットボトルを凍らせたものを取り出すと、スプーツタオルに包んで、夏美に手渡した。

ありがとう、と夏美は御礼を言い、それで上瞼を冷やし始めた。

……

しばらくの間、沈黙が続いた。

「あの、さ。その、梅咲ってさ……」

蓮は、モジモジとしている。

「今、好きな奴とか、いる？」

「？　いないけど？」

蓮はほっと、胸を撫で下ろし、そして顔を真っ赤にして、言った。

「俺と、つつつつつ、付き合ってほしいんだけど！」

シーン、という効果音が、この場によく似合った。

「……あの、何か言ってくれね？　沈黙って、一番キツイぜ？」

遂に蓮が堪えかねて、夏美に言った。

「……私なんかで、本当にいいの？」

「梅咲じゃないと、駄目なんだ」

蓮が、赤面しながら言った。

「私なんかでよければ」

「……えっ!？」

「だから、私も、蓮君のこと、好き」

玉碎覚悟で告白した蓮は、あまりの呆気なさに、口をあんぐりと開けていた。

「本当に？」

「本当」

夏美は、とびっきりの笑顔で答えた。

「そろそろ、戻ろうか？」

夏美が言った。

「ああ」

夏美と蓮が、仲良く手を繋いで、体育館に戻ると、待ち構えていた男子部員の先輩達が、一斉に蓮をぼこりにかかった。

一人は泣きながら、一人は憤りながら、各々、蓮を蹴るなり殴るなり、好き勝手やっていた。

そんな光景も、夏美には微笑ましく見えた。

お父さん、お母さん　そしてお姉ちゃん。　天国で見守っていてくれますか？

私は今、この学園に来て、初めて自分の居場所を見つけました

しばしばしんみりしていると、先輩達の中から抜け出てきた蓮が、夏美のところに来てきた。

「ところで、さっきした約束覚えてる？」

蓮は半分、キョトンとして、聞いてきた。

「ああ、試合？」

すると蓮は、目をキラキラと輝かせた。「今からやるっぜ！」

「今から！？」

蓮は既に、ラケット片手に、アップを始めていた。

「早く！」

夏美は笑いながら、蓮とコートに行った。

「んじゃ、始めんぞ！」

「うん！」

「ファーストゲーム、ラブオール・プレー！」

F i n

Final・Game・私の居場所（後書き）

どうも、Mayです。 Final・Game、更新が遅い上に、長かったですね。ごめんなさい。ところで、これがまだ完結している状態になっているのに、皆さんは気がつきましたか？実はこのあと、番外編と、プチルール雑談があります。興味がある方は、ぜひ、読んでください。では。 May。

番外編 a n d バドミントン、プチルール講座（前書き）

文字の誤りがありましたので、訂正板です。

番外編 and バドミントン、プチルール講座

私の一日は、お姉ちゃんを起こすことから始まる。

「起きて、お姉ちゃん！ 朝練に遅れるよ！」

「うーん、もつと寝かせてよ、夏美ちゃん」

このとおり、お姉ちゃんはお寝坊で、起こすのは一苦勞。

「ひゃっ！」

今日は、ベッドから自分で落ちて、起きてくれた。

「ホーラ、早く早く」

お姉ちゃんを押しながら、今度はお父さんを起こしに行く。

「お父さん！」

「おはよう、夏美」 お父さんは、声をかけると、すぐに起きてくれた。

そのあと、お母さんのお手伝い。

働き過ぎだと、よく言われる。

でも、楽しいからやってるんだけどな、これ。

何気ない毎日が、いつも楽しかった。

けど、それが一瞬でブチ壊される時が来るなんて、思いもしていなかった

今思うと、その頃の私は子供だった。

でも、会えるものなら、もう一度、家族に会いたい。

神様、あなたは どうして、私から全てを奪ったのですか？

私が何か、あなたの気に障るようなことを、しましたか？
返して。

暖かな家族を。

幸せな毎日を

どんなに泣いても、誰も戻っては来ない。 私は、独りだ。

あの人達に出逢うまでは。

星華学園に行つて、暖かな生活を味わつて、沢山の友達ができて

毎日が、楽しかった。

好きな人も、できました。

明るくて、でもちょっとドジ＆馬鹿で、けれど、力いっぱい、私のことを、守ってくれる人。

誰よりも、暖かい人。

蓮君、あなたのことを、言ってるんだよ？

そして、今日から本当の意味で、新しい生活が始まる。

だから、学校に、行つてきます。

Fin【夏美と蓮（+作者）のバドミントン、プチルール講座！】

May

「どうも！ プレ・バド！の作者のMayです！これから、バドミントンを全く知らない方のために、プチルール講座を開催したいと思います！進行は主に夏美と蓮ですが、作者も時々乱入致しますので、悪しからず。では、夏美&蓮、よろしくお願いします！」

夏美

「どうも、ヒロインの夏美です」

蓮

「ヒーローの蓮です！」

夏美

「えーと、先ず、小説中に出てきた、用語について、説明しよう」と

思います」

蓮

「いえーい！」

夏美

「でもその前に、バドミントンのルールについて、変更があったことは、皆さんご存知ですか？」

蓮

「2006年、トマス&ユーバー杯という大会以後、バドミントンのゲームは正式に、『サービスポイント制』から、『ラリーポイント制』に決定したんだ！」

夏美

「点の入り方が、バレーと同じと考えてもらえば大丈夫です」

蓮

「それと、一ゲームの試合が、21ポイントに統一されたんだぜ！」

夏美

「以前まで、女子シングルスは11点、ダブルスは15点、男子はシングルスとにも、15点でした」May

「因みに作者は、ちょうどルールが変わると同時に引退したので、ラリーポイントでの試合をしたことはありません。この小説を書くのは、苦労したよ？」

夏美

「どうやって書いたんですか？」

May

「この小説は、以下作品を参考にさせてもらいました」

やまとの羽根・全四巻・アップアーズ・KC。

スマッシュ！・1・2以下続巻・週間少年マガジンKC。作者は共に、咲香里先生です。共に講談社出版。スマッシュ！は、週間少年マガジンにて、好評連載中です。

夏美

「そろそろ、本題に入りましょう」

蓮

「先ず、フォルトから、説明するぜ！」

夏美

「本文に出てきたように、フォルトを取られる時は、二通りあります」

蓮

「本文に出てきた、オーバーザ・ウエストを見本にして、説明するぜ！」

夏美

「一つは、反則としてとられる場合です」

蓮

「オーバーザ・ウエストは、サーブを打つ時、ラケットがウエストより高いと、取られることがあるんだ」

夏美

「主審が気付いて、警告しても、再びやると、フォルトを取られ、点が相手に入り、サービス権も、相手に移ります」

蓮

「下の方の大会では、そういうのに甘いけど、上の方に行けば、すぐに取られるよな」

夏美

「続いては、自分のミスのフォルトです」

蓮

「例えば、自分が打ったシャトルが、ネットに引っ掛かったり、相手側のコートに行かず、シャトルが自分のコートや、外に出てしまつと、フォルトになるんだ」

夏美

「これも相手のポイントになるので、気を付けてね」

蓮

「次は、技についてだ！」

クリア

蓮

「クリアは、普通に高く大きく返すだけ。でも、基礎がなってないと、高く遠くに飛ばないんだ」

夏美

「クリアは基本中の基本なので、しっかりマスターしよう！」

スマッシュ

蓮

「これは、打点（シャトルを打つ位置）のできるだけ一番高いところで、シャトルを思いっきり打つんだけど」

夏美

「その時のポイントは、シャトルがラケットに当たる瞬間、手首を曲げること。これができないと、スマッシュは打てません」

蓮

「打てるようになるまで、時間はかかるけど、諦めないで頑張ろう！」

ジャンプスマッシュ

夏美

「これは文字通り、ジャンプをしている状態で、その勢いに乗って、スマッシュを打つ技です」

蓮

「夏美のはすごかったなー」

夏美

「初心者は危ないので、絶対にやらないでね」蓮

「俺、昔にチャレンジして、脚、捻った」

夏美

「……………」

ヘアピン

夏美

「これは、シャトルを小さく返す技です。でも、下手な人がやると、高く上がったちゃったりするの」

蓮

「で、ネット際で打ち込まれるんだよね？」

夏美

「これをプッシュといいます」

ドライブ

夏美

「これは、スマッシュとクリアの中間ぐらいの技かな？」

蓮

「スピードはスマッシュ見たくあるけど、シャトルは落ちないで真っ直ぐ行くんだよね」

夏美

「上級者同士の、ドライブの打ち合いは、圧巻です」

【プレーをするときの注意事項】

May

「これから、バドミントンをする時の、注意事項を説明します」
その1・屋外でのプレーは、できるだけ避ける。

May

「これは、シャトルが軽いため、風で飛んでしまうからです。ほかに、太陽がまぶしいので、白いシャトルを見失ってしまいます。そのため、バドミントンは、体育館等で、窓を閉めきり、暗幕を閉めます。夏だろうが、それを守らないと、きちんとした試合はできません。近くの公共の体育館等で、解放をやっていることがあるので、行ってみましょう」 その2・荷物

May

「必ず持つて行きたいのは、スポーツドリンク、タオル数枚、着替え等です。運動すると汗が出ますね。その時、血中の塩分が出てい

るので、飲物は必ず、スポーツドリンクを持って行きましょう。夏等は、全てを余分に持って行きましょう」

その3・周りをよく見て

May

「打ち合い等をする時は、必ず周りをよく見て打ちましょう。じゃないと、とんでもない大怪我の原因になります。因みに作者は、左目に二回、スマッシュがブチ当たったことがあります。気をつけてください。では、プチルール講座は、これにて終了します！ありがとうございました！」

Fin

番外編 a n d バドミントン、プチルール講座（後書き）

長々しい小説を読んいただき、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4154b/>

プレ・バド！ Love&sporty

2010年10月26日01時38分発行